

【論 文】

化粧による女子高生の身体構築

合 場 敬 子

【要 旨】

神奈川県私立の男女共学高に在籍する32人の女子生徒にインタビューを実施し、化粧の有無、化粧をする理由、化粧をしている場合の効用と代償について考察した。化粧を行っていない女子生徒は5人で、それ以外は化粧を行っていた。化粧を継続する理由、すなわち素肌を白く、きれいに見せる、顔の印象を変える、可愛い二重の目をつくる、化粧が好きという理由はすべて、「想像された自己」に向かって化粧を続けることを素晴らしいと感じ、そのことに力づけられ、楽しさを感じるからという、Widdows (2018) が指摘した理由に包含されることが明らかになった。これは、第二波フェミニズムで主張されていた化粧は男性による強制という視点の限界を示している。加えて化粧は大人の女性の礼儀/身だしなみという考え方が依然として存在し、それによって化粧を行う側面があることも明らかになった。

キーワード： 化粧, 女子高生, 美容, 身だしなみ, 礼儀, ジェンダー, 効用, 代償

1. はじめに

英語圏の女性身体に関する研究の中では、90年代後半から、10代女性の身体構築における問題が少数の研究で指摘されていた。例えば Pipher (1996) は、自分が思春期を経験した1960年代の初頭に比べて、現代のアメリカの少女たちは美しくなることへの強い圧力に直面していると指摘している。また Brumberg (1998) も、「今日の少女たちは、重要な自己のアイデンティティの表現として、自己の身体の形や外見に関心を払っている」(xxi)と指摘し、それが第二次性徴開始後すぐに起こっていると述べている。この傾向は2000年代に入っても継続し、Aapola et al. (2005) は、少女や若い女性は、自己の身体が社会的に承認されるために、絶え間なく奮闘しており、それにより多くの労力と時間を割くことや、消費活動に参

加することが要請されていると指摘する。身体イメージや身体への不満に関する多くの先行研究を検討した Grogan (2017) は、女性の身体への不満は8歳から始まり、若い女性は成人女性と同じように痩せた身体を理想としていることを指摘している。Girlguiding (2016) によると、7歳から21歳の女性で、自分の外見に満足している割合は、2011年の73%から2016年には61%に減少している。また、自分の見え方について恥ずかしいと思う割合は年齢が上がるごとに増加傾向にあり、7歳から10歳は15%だが、17歳から21歳は50%にも達する (Girlguiding, 2016)。これらのデータは外見に自信が持てない若い女性が増えていることを示している。

日本における10代女性の身体は、主に体型との関係で考察されてきた。BMI (肥満を測る指標) では痩せや普通である女子大生は、自分を太っていると認識する傾向が強いことが指摘されている

(国府田, 2014; 半藤・川嶋, 2009; 水村・橋本, 2002)。2013年の調査では、女子大生の約82%が「普通体重」もしくは「低体重」に属しているにも関わらず、約95%を超える女子大生が現在よりも体重を減らしたいという痩せ願望を持っている(国府田, 2014)。このような痩せ願望はダイエットの実践を生み出し、2006年の調査では、女子大生の61%(半藤・川嶋, 2009)、2010年の調査では女子高生の約46%(日本青少年研究所, 2011)がダイエットを経験していた。さらに自分の体型に満足していない者が、女子大生の約73%(半藤・川嶋, 2009)に上っている。2017年に実施された日本、アメリカ、中国、韓国の高校生の男女を対象にした調査(国立青少年教育振興機構, 2018)では、日本の女子集団の中で自分の体型に満足している者の割合が23.0%となり、8つの集団(4ヶ国それぞれの男女の集団)の中で最も少なかったため、日本の女子高生は自分の身体に満足していない傾向があると考えられる。これらの研究は10代女性がどのような体型を望ましいと考えているのか、またその望ましい体型を獲得する際に直面している困難を明らかにした点で重要であるが、10代女性の体型以外の身体構築について考察していない。また上記の研究のほとんどは女子大生を対象にしており、女子高生に焦点を当てた研究は少ない。

一方で、10代女性が行っている身体構築の一つである、化粧において変化が生じていることが幾つかの調査で指摘されている。ポーラ文化研究所の調査(2018)によると、2015年から2018年の間に、10代後半女性のメイク実施率が約17%増加し、2018年のメイク実施率は約71%に達している。また本研究で焦点を当てる女子高生に限ってみると、女子高生73人のうち、約55%がメイクをしている(ポーラ文化研究所, 2018)。また2020年に実施した調査(LINE株式会社, 2020)では、女子高生317人のうち、約57%がメイクをしていることが指摘されている。これらのデータは、半数近くの女子高生の中で化粧という身体構築が広く行われていることを示している。

本研究は10代女性のうち女子高生に焦点をあて、彼女たちの化粧を考察した。なぜ女子高生な

のか?それは、女性の半数近くが化粧を始める時期が高校入学以降だからである。2006年に女子大生190名を対象にした調査では、メイクの開始時期が中1から高1の間に集中していることが指摘されている(石田, 2009)。ポーラ文化研究所(2019)によると、昭和から平成初期に10代であった現在の40~64歳のメイク開始年齢は、高校卒業時にあたる18歳で約50%であった。一方、現在の20~34歳は半数近くが17歳までにメイクを開始している。これらの調査は化粧の開始が低年齢化していることを示しているため、本研究は半数近くが化粧を始める高校時代に焦点を当てる。

なぜ化粧なのか?それは第一に、上記で述べたように、日本における先行研究において身体の一部である「顔」に焦点が当てられていないからである。また半数近くの女子高生が化粧を行っているにもかかわらず、女子高生が化粧を行っている理由や、彼女たちが化粧による効用や代償をどのように認識しているのかについての研究が行われていないので⁽¹⁾、それを解き明かす意義があるからである。

本稿では、化粧をすることを「化粧実践」と捉える。その第一の理由は、1970年代の第二波フェミニズムの中で、女性が自己の身体を美しくするために行う行為(例えば、ダイエットをする、体毛を除く、化粧をするなど)をbeauty practices(美容実践)と呼んでいるからである(Jeffreys, 2015)。第二の理由は、Widdows(2018)が主張する「美の理想」(the beauty ideal)が支配的な「倫理的理想」(an ethical ideal)になっており、それが道徳的枠組みを作っていることに関係する⁽²⁾。この枠組みが、どのような外見が成功/失敗か、善い/悪いかを判断する共有された基準と、その基準を満たす努力のための到達点を提供し、我々の日々の生活を作る習慣や実践を方向づけているからである。つまり、多くの人々は美の理想という道徳的枠組みに基づいて、自分の身体を「美の理想」に近づけようとする行為を行っている。一方で、実践が「主義・理論などを実際に自分で行うこと」(デジタル大辞泉)を意味するので、自分の身体を「美の理想」に近づけようとする行為を

美容実践、そのうちの化粧をする行為を化粧実践と呼ぶことができる。以下、美容実践との関係で化粧を考察する場合は、化粧実践という語を使う。

2. 先行研究の検討

本研究に関係する先行研究を3つの方向から検討する。第一は大人の女性の化粧の理由に関する研究、第二は大人の女性の化粧の効用と代償に関する研究、第三は女子高生の化粧に関する研究である。

2-1 大人の女性が化粧をする理由

女子高生の化粧を考察した研究はほとんどないため、この節では、大人の女性の化粧が先行研究によってどのように考察されているのかを検討する。英語圏においても、なぜ大人の女性が化粧をするのかに関しての研究は非常に少ないが (Jeffreys, 2015)、幾つかの異なる視点が提示されている。

第二波フェミニズムは、化粧を含む美容は女性に対する抑圧であると主張していたが (Jeffreys, 2015)、それとは異なる視点を持つ第三波フェミニズムが90年代に登場した。第三波フェミニズムは多様な「ガール」文化を推進した (高橋, 2020)。第二波フェミニズムは女性性を表示するものや実践 (バービー人形と遊ぶこと、化粧をすること、ハイヒールを履くことなど) は女性への抑圧だと見なしタブー視していたが、「ガール」文化はそれを肯定する (Baumgardner & Richards, 2000)。したがって第三波は、美容実践などが構築する女性性がフェミニズムと対立するのではなく、両立可能なものであることを主張した (田中, 2012)。

一方2000年代に入ると「ポストフェミニズム」と呼ばれる状況を分析する研究が登場した (菊地, 2019)。その研究の基礎を作った McRobbie (2009) は、ポストフェミニズムを「新しい種類の反フェミニスト感情によって特徴づけられる状況である」(p.1) と把握し、フェミニズムを当然のものとして想起させながら、フェミニズムによって男女

平等は達成されたのでフェミニズムはもはや不要であると示唆すると説明する。つまり、ポストフェミニズムは第二波や第三波フェミニズムを乗り越えた発展的なフェミニズムではない。ポストフェミニズムと女性身体との関係をより明確に論じたのは Gill (2007) であり、西欧のメディアにおけるポストフェミニズムを「感性」(sensibility) として把握できるとしその特徴を指摘している。その中で、自分らしくあること (being oneself)、自らの欲求に従って気持ちよくなること (feel good)、自分を楽ませること (pleasing themselves) はポストフェミニズムの感性の中心であると主張している。つまりポストフェミニズムは、気持ちがよくなるため、自分を楽ませるために美容実践に参加することをもっぱら奨励する。したがって、第三波フェミニズムと同様に、ポストフェミニズムも女性の美容実践の選択にどのような社会的、文化的影響があるのか、美容実践が引き起こす結果などを批判的に考察することはしない。つまり美容実践の理由を批判的に考察してきたのは第二波フェミニズムの視点であるので、本研究では、以下第二波フェミニズムとそれを批判的に検討した研究 (下記に言及する幾つかの英語圏の実証研究と Widdows (2018)) に焦点を合わせ考察する。

第二波フェミニズムの主張を踏襲している視点として、Wolf (2002) は、客観的・普遍的に存在する「美」を女性は体現しなければならないという「美」の神話が存在するため、女性は美しくなることを強制されていると主張する。そしてこの「美」の神話は、「男性たちの制度や、制度化された権力に係わるもの」(p.18) であると述べ、「美」の神話が男性によって女性に強制されたものであることを示唆している。「美」を体現するために、化粧をすることも要求されるので、多くの場合、女性は化粧を「美」の神話からの強制を受けて行っていると Wolf (2002) は述べている。また Jeffreys (2015) は女性の化粧実践を含む美容実践は、自らの身体を変化させたり飾ったりすることで、女性が男性に従属する階級の成員であることを示すために行われていると主張する。さらに男性が美容実践を女性に強制させる権力を持っている文化において

は、女性たちに美容実践に参加するか否かの選択肢はないと Jeffreys (2015) は述べる。この視点を「強制としての化粧」と呼ぶ。

この「強制としての化粧」という視点に対して、Bartky (1991) は Foucault が提示した規律実践⁽³⁾ の概念を援用し、女性が化粧をする理由を説明する。規律実践は、身体に侵入し、身体の運用と体力を統制し、身体の「効用性」(p.143) を高め、「身体フォルムの力フォースを増加」(p.143) させることを目的にする。この規律実践の本質を、ベンサムが設計した刑務所、パノプティコンに見ることができると Foucault (1977) は主張する。この施設では受刑者は自分が現実に凝視されているかどうかを確定できないが、自分がいつでも凝視されうることを認識しているので、パノプティコンの受刑者は自分で自分を監視することになるのである。

Wolf (2002) や Jeffreys (2015) とは異なり、Bartky (1991) は、女性が行う規律実践は男性が女性に一方的に強制しているのではなく、パノプティコンの受刑者のようにだれからも強制されていないと主張する。自分の身体を「女性的である」と感じることは、人間が男性か女性かのみ分類される社会においては、女性としての自己意識にとってとても重要なので、多くの女性はパノプティコンの受刑者のように、自ら自分の身体を監視し、女性性を表現した身体を構築するように努力し続けると Bartky (1991) は主張する。一方 Bartky (1991) は、「女性の規律実践は、性的従属の抑圧的で不平等なシステムとしてのより大きな規律として理解されなければならない」(p.75) と主張し、このシステムは女性を従順にし、男性にとって素直な相手にすることを目的としていると主張している。つまり Bartky (1991) は、女性が行う規律実践はだれにも強制されていないと主張しながら、結局男性が女性を抑圧する権力構造の中に規律実践が存在することを想定しているので、美容実践は男性による女性に対する抑圧であるという Wolf (2002) や Jeffreys (2015) に類似する視点として解釈することができる。

一方で幾つかの実証研究は、女性自身の体験を分析することで、「強制としての化粧」という視点

に異論を唱えている。Beausoleil (1994) によると、女性は化粧を強制されているのではなく、女性自身が積極的に自己表現の手段として化粧をしている。また Lakoff and Scherr (1984) も、研究対象となった女子大生たちの多くが化粧を楽しんでおり、一方で自尊心を高めたり自信を持つために、他方で周囲の人を不快にさせないために化粧をしていることを明らかにした。これは、女性は他者に外見を提示するときは化粧をすべきであるという規範の存在を、一部の女性が意識して化粧をしているということを示している。また Dellinger and Williams (1997) によると、アメリカの職場の女性は、健康的である、異性愛者である、有能であると見られるために化粧をしていた。理由は、職場が暗黙のうちにそれらの性質を女性に要求しており、それらの性質を満たすことが職場での成功に結びつく可能性があるからであった。

Widdows (2018) は美容実践全体⁽⁴⁾ について論じているが、化粧実践が美容実践の一部であるので、彼女の主張を化粧実践に応用できると考えこの節で検討する。女性たちが化粧実践などの美容実践を行うのは、Wolf (2002) や Jeffreys (2015) が主張するような男性からの強制によるものではないと Widdows (2018) は主張する。なぜなら先行研究の検討から、「男性も自らを美しくし、見られる(“to be looked at”) ようになり、ますます美の理想に曝されている」(p.234) ので、男性が美容実践を手段として女性を従属させているという主張は正しくないと言主張する。

女性が美容実践を行う第一の理由は、Widdows (2018) によると、道徳的枠組みとしての「美の理想」に従うことによって、幾つかの恩恵を得ることができる、あるいはそう信じるからである。Widdows (2018) は先行研究を基に、美しさが雇用可能性や賃金を増加させたり、魅力的な個人は積極的なパーソナリティ特性(親しみやすさ、自信、知性)を持つと見なされたりするなどの例を挙げている。これは Dellinger and Williams (1997) の研究で、有能であると見られるために化粧をするという理由に合致する。

第二の理由として、化粧が美の理想の最低限度

の基準を満たすための習慣になっているからであると Widdows (2018) は主張する。美容実践は最初社会に承認され、その後多くの場合美の理想の最低限度の基準として要求され、それを満たすための習慣になる傾向がある。その一例として化粧は、現在多くの状況で多くの女性にとって、美の理想の最低限度の基準を満たすための習慣的な実践となっていると Widdows (2018) は主張する。最低限度の基準が広範になり、完全に近い支配力を持つと、最低限の基準は不可視のものになる。つまり、最低限の基準は美に関する規範としてはもはや見なされなくなり、健康であること普通であることに必要な、最低限の身だしなみ実践とみなされるようになる。逆に言うと、健康的に見えるために化粧をすることは美の理想からの要請であるにもかかわらず、美とは関係のない身だしなみとして化粧をしているように解釈されるのである。美の理想の最低限の基準が身だしなみ実践になると、それを実践しないことは、普通ではない、すなわち異常であるとみなされるので、個人がその美容実践を行わないことを選択することはできなくなってしまうと Widdows (2018) は主張する。Lakoff and Scherr (1984) が研究対象とした女子大生の一部は、周囲の人を不快にさせないために化粧をすると回答しているが、身だしなみは他者のために行うので (石田, 2009)、彼女たちは化粧をすることを最低限の身だしなみと考えていると解釈できる。第二の理由は言い換えると、身だしなみとして化粧が行われているということになる。

第三の理由は、道徳的枠組みとして美の理想において構築される「想像された自己」(the imagined self) (Widdows, 2018, p.158) に関係する。想像された自己は、特定の身体と同一化し、その身体は我々が現実を得ている身体に同一化しているだけでなく、我々がすべき美容実践に参加することによってのみ将来得られる、あるいは得られるかもしれない、または現在得られた身体である。たとえば我々が想像された自己を決して得られないと知っていても、また美容実践を続けることで様々な代償 (多くの努力や時間の投入など) を払わなければならないにもかかわらず、想像された自己に向かって

美容実践を行い続けることが、我々にとって素晴らしいこと、楽しいこと、力づけられることとして感じられると Widdows (2018) は主張する。Beausolei (1994) で指摘された自己表現の手段としての化粧や、Lakoff and Scherr (1984) の女子大生が自尊心や自信を持つために化粧をすると答えているのは、この想像された自己の作用によると解釈できる。

日本社会における化粧については、化粧は成人女性の身だしなみあるいは礼儀であるという考えが支配的であり、この考えは江戸時代後期に出版され関東大震災まで刷り続けられた『女子愛嬌都風俗化粧伝』によって長期間流布された石田 (2009) が指摘している。この時代は「化粧は化粧の当事者を取り巻く人、すなわち社会のためにするものだった」(石田, 2009, p.31)。ところが、この考えが 1990 年代後半に崩れ、化粧は外見の美しさや心と体の健康のためにするものに変化し、「化粧をする当事者のために行うものという意味」(石田, 2009, p.31) に変化したと主張する。Widdows (2018) の枠組みを当てはめると、石田 (2009) が述べる 1990 年代後半以前は、身だしなみとしての化粧であり、1990 年代後半以降は、想像された自己の作用による化粧と解釈することができる。

鈴木 (2006) は石田 (2009) と異なり、「薄れてきてはいるが、基本的に現在でも女性のお化粧は「礼儀」と考えられている」(p.155) と述べる。一方で、女性が化粧をするのは何よりもそれをするのが楽しいからであるとも指摘する。「顔を作り上げるという意味での化粧＝メイクアップから、より美しい素肌を目指してのお肌のお手入れ＝基礎化粧まで、その過程すべてが面倒くさくもありませんが、楽しい」(鈴木, 2006, p.17-18) ものであり、「メイクをして素顔よりはマシな顔が作れた時は気分が明るくなる」(鈴木, 2006, p.19) と指摘する。しかし鈴木は、化粧をすることに「うんざりする時がある」(鈴木, 2006, p.48) と告白する。それは「現代社会において、美しさを求めることは善である」(鈴木, 2006, p.43) という考えがあり、女性はいつまでも美しさを目指さなくてはならないという「キレイ・イデオロギー」(p.49) が

生み出されているからであると主張する。

このように鈴木（2006）は、化粧の多様な理由に言及している。化粧は女性の礼儀であるという視点は、化粧が身だしなみになっておりそれをしてないと礼儀を欠くことになるということなので、身だしなみとしての化粧という、Widdows（2018）の第二の理由に合致する。化粧を続けていくことが楽しくも面倒くさいと感じるのは、道徳的枠組みとして美の理想において構築される「想像された自己」により、多くの女性たちはそれに近づくように努力することに喜びを感じつつ、そのための代償を払っているという Widdows（2018）の第三の理由に合致する。そして最後の「キレイ・イデオロギー」とは、まさに Widdows（2018）が主張する美の理想という道徳的枠組みが日本にも存在することを指摘している。

以上の先行研究の検討から明らかになった化粧をする理由は、1) 男性によって強制されているから、2) 化粧によって恩恵を得られるから、3) 化粧が身だしなみになっているから、4) 想像された自己に向かって化粧を続けることが、我々にとって素晴らしいこと、楽しいこと、力づけられることとして感じられるからという4つである。それでは女子高生たちも大人の女性と同じような理由によって、化粧を行っているだろうか？4つの理由を参照しつつ、女子高生の化粧を行う理由を分析する。一方で上述した先行研究は、大人の女性が化粧をする理由は考察しているが、化粧をしない理由を考察していない⁽⁵⁾。本研究では、化粧をしない女子高生にもその理由を尋ねているので、化粧の意味を多面的に考察することができる。なぜなら研究対象となった高校では化粧を実質的に禁止しているので、そのために化粧をしたい女子高生も学校では化粧をしないという選択をしている場合もあるが、学校で化粧をしてはいけないという理由以外の、化粧をしない理由についても言及しているからである。

2-2 大人の女性の化粧の効用と代償

化粧の効用と代償についての社会学の領域での

先行研究は乏しいので、心理学の領域の先行研究を検討する。まず英語圏の心理学における多くの研究は、女性が化粧をすることによってどのような効用を得られるのかに焦点を当てている (Kellie et al., 2021)。多くの研究は、化粧が身体的魅力を増すことを指摘している (Graham & Jouhar, 1981; Etcoff et al., 2011; Jones & Kramer, 2016; Jones et al., 2015; Mulhern et al., 2003)。また化粧をしている女性は化粧をしていない女性に比べて、より健康的で自信にあふれ (Nash et al., 2006)、より好ましいパーソナリティを持っていると他者から評価されている (Graham & Jouhar, 1981)。

一方で Anchieta et al. (2021) は、上記の先行研究は化粧をした顔を他者がどのように評価するかに基づいて化粧の効果を考察しているが、女性が自分の化粧の効果をどのように認識するかについてはほとんど研究されていないと指摘する。そこで Anchieta et al. (2021) では、化粧をしない場合と5段階の化粧をした場合のそれぞれの自分の顔に対して、研究参加者がどのように感じるかを尋ねている。結果として、色がつかない化粧をしない女性は化粧を全くしていない状態と比べて、自分自身をより女性的で健康的であると感じ、より高い自尊感情を持っていた。また、色がついた化粧をした時は色がつかない化粧の時と比べて、これらの評価がより高くなったことを指摘している。

日本の心理学の領域でも、化粧の効用について多くの研究が行われてきた (九島, 2020)。なかでも化粧の心理的効用に関する先駆的な研究として、松井ら (1983) は、化粧の心理的効用モデル (以下、Mモデルと呼ぶ) を構築し、「化粧行為自体が持つ満足感」「対人的効用」「心の健康」の3つの効用を想定している。「化粧行為自体がもつ満足感」は「自己愛撫の快感」「変身願望の充足」「創造の楽しみ」「ストレス解消」「快い緊張感」から構成される。「対人的効用」は、「外見的欠陥の補償」「外見の評価の上昇」「周囲への同調・期待への対応」「社会的役割への適合」「伝統的性役割に基づく identity の自覚」から構成される。「心の健康」は、「対人的効用」を土台とし、自信や自己充実感を生むと指摘されている⁽⁶⁾。しかし、注意し

なければならないのは、笹山・永松（1999）が指摘しているように、上記の M モデルで指摘された化粧の効用は化粧をする人の意識であると捉えられ、化粧をしない人はこのモデルの効用を認めないことが予想される。幾つかの研究は M モデルを支持している。阿部（2002）は M モデルの「ストレス解消」を、宇山ら（1990）は M モデルの「積極的な自己表現や対人行動」を、余語ら（1990）は M モデルの「自信や自己充足感」を支持している。

一方、心理学におけるほとんどの研究は化粧の効用に焦点を当てているため、化粧をすることによる代償（以下、化粧の代償）を、化粧をしている女性自身がどのように認識しているかについては、英語圏でも日本においてもほとんど研究されていない。化粧の代償を示唆する数少ない研究としては、飛田（1996）の研究がある。この研究は直接的に化粧の代償を研究協力者に尋ねているわけではないが、一部の協力者が化粧をすることや落とすことを面倒だと感じたり、化粧をすると息苦しさを感じたり、化粧による肌荒れや炎症を経験していることを示している。本研究は、女子高生へのインタビューを通じて、化粧による効用と、英語圏でも日本においてもほとんど考察されていない化粧の代償についての考察を行う。

2-3 コギャルの化粧実践

米澤（2008）は、1990 年代にコギャルと呼ばれる女子高生たちが登場し、彼女たちの化粧の基本は、茶髪、細眉、褐色の肌、そしてマスカラによる目の強調であったと指摘している。「コギャル」が雑誌メディアに登場したのは 1993 年の『SPA!』の記事が最初で、小麦色の肌に茶髪、「蛍光色のトロピカル柄」（p.13）のファッションに身を包み、夜はクラブで遊ぶ 14 歳から 18 歳の若い女性と定義されていた。米澤（2008）はコギャルがあくまで女子高生の一部であると明示しているが、石田（2009）は女子高生全体がコギャルであるかのように記述している。その上で石田（2009）は、女子高生たちの化粧が他の世代の女性の化粧を牽引するようになり、それまでごく少数の女性が特殊

な場合にしか使わなかった「マスカラ、付け睫毛、二重瞼にする糊、リップグロス、肌を光らせるパウダーなど」（石田、2009, p.29）の化粧品がより多くの女性によって日常的に使われるようになり、それらを使うことで他者にはっきり化粧をしている印象を与えるようになったと述べている。

米澤（2008）は、「コギャル」と呼ばれた女子高生たちが、「コギャル」ではない他の女子高生に影響を与えて、化粧が女子高生の間で一般化したと主張している。しかし、女子高生を対象にした雑誌『プチセブン』の 1990 年 4 月 1 日号では、女子高生 5000 人を調査した結果として、「女のこどもんメイク大好き!!」という記事で、彼女たちの化粧が紹介されている。メイクをするのは、ディスコなどに遊びに行く時が最も多く、次いでデートする時であり、一部の女子高生は目立たない化粧をして学校に行っていることが指摘されている。この記事によると、「コギャル」がメディアで認識される 1993 年以前に、女子高生の中で「コギャル」であるか否かに関係なく、化粧をすることが少なくとも 1990 年ごろには既に広く行われていたと推測される。本研究では、インタビューに協力してくれた 2000 年代初頭生まれの女子高生たちが、かつての「コギャル」たちと同じような化粧をしているか否かを考察しているが、本論文では、紙幅の制限により記述することができないので、この点は別稿に譲りたい。

3. 研究方法

3-1 研究方法とインタビュー協力者

本研究は、神奈川県に位置する私立の男女共学高校であり、2017 年度卒業生の約 85%が進学（短期大学、専門学校を含む）している南風高校（仮名）で実施した。南風高校では 3 つのコースが用意され、難関 4 年制大学を目指す A、B コースとそれ以外の大学を目指す C コースがある。各学年それぞれ 1 組ずつが A、B コースに属し、その他の組は C コースである。インタビュー協力者は 3 つのコースのいずれかに所属している。

本研究では南風高校の女子生徒に対するインタビューと授業観察を中心にした参与観察を行った。参与観察を行った理由は、南風高校という特定の間における女子生徒のインタビューでの発言の意味の理解に役立てるためと、授業観察を通じて筆者の存在に親しんでもらい、ひいては女子生徒のインタビューへの協力を促進するためである。

参与観察は2018年4月の新学期から2019年2月下旬まで実施した。まず本研究とは別の運動実践研究のために、2年の1, 2組と5, 6組がそれぞれ合同で行う体育の授業を観察することにした。次にこれらの組が受ける授業の中で、生徒と教諭間のやり取りや生徒の発言場面が多いと考えられる授業、英語、現代文、古典などを選んで参与観察を行った。理由は、生徒と教諭間の対話の中に身体、外見、美容実践に関する考えが言及された場合、それをデータとして収集できると考えたからである。授業の他に、体育祭、文化祭、合唱コンクールなどの学校行事をすべて観察した。

インタビュー協力者は次のようにして集めた。2018年6月から、参与観察をしていた数組と練習を観察していた幾つかの部活を訪問し、インタビューへの協力依頼の文書を配布し、その後保護者の同意書を提出した1年から3年生までの32人の女子生徒に、放課後学校内でインタビューを実施した。内訳は3年4人、2年20人、1年8人であった。一人当たりのインタビューの時間は約40分から約1時間20分で、二人でインタビューを受けたいと申し出た生徒には二人同時に2回に分けてインタビューを実施した。インタビューの前に、女子生徒には各自のジェンダー・アイデンティティ、性的指向などを尋ねる質問票への記入を依頼した⁽⁷⁾。

インタビューは、半構造化インタビュー、すなわち質問内容はあらかじめ決まっているが、対象者の話の展開を尊重し、その話の流れに沿って質問の順番を変える方法を使って行った(Flick, 2002)。本研究で分析に使った質問は、学校での化粧の有無、学校外での化粧の有無である。化粧をしている生徒には、化粧をするようになったきっかけ、化粧をすることで得られる良いことと困っ

たことを尋ねた。化粧をしていない生徒には、その理由を尋ねた。インタビュー内容は録音し、専門業者が音声データから文書データへの変換を行い、両データが一致しているか否かの確認作業を筆者が行った。

3-2 データの分析方法

文書データの分析は、Kvale (1996) が「特別な方法による意味の産出」(p.193)と呼ぶ方法を使った。これはMiles and Huberman (1994)により、質的テキストにおいて意味を産出するための方法として例示されている。本研究ではその一部、インタビュー内容を吟味し、主要なパターンやテーマの把握とグループ化、個別の発言内容の比較をする方法を使った。具体的にはインタビューに繰り返し現れる単語や語句を手掛かりに、彼女たちの発言を意味ごとにグループ化し、彼女たちの化粧に対する認識を把握した。この分析によって抽出されたカテゴリーは、多くの場合相互排他的であるとみなされることが多いが、Hodson (1991) が示すように実際は重なりがある場合がある。本研究では、化粧を始めた理由と化粧を継続している理由について、一部の女子生徒は複数の理由を挙げているので、抽出されたカテゴリーは一部重なりを持っている。

4. 分析結果

「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」(薬機法)の第2条3項によると、化粧品とは「人の身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容貌を変え、又は皮膚若しくは毛髪を健やかに保つために、身体に塗擦、散布その他これらに類似する方法で使用されることが目的とされている物で、人体に対する作用が緩和なものをいう。」(e-GOV 法令検索)と定義されている。したがって、化粧品には、肌の状態を整えるスキンケアとメイクアップが含まれることになる。しかし、日常生活である人が化粧をしているか否かを判断するのは、メイクアップの有無に

よっている。なぜなら、スキンケアは目立たないが、メイクアップは素肌に色をつけるので認識しやすいからである。したがって、南風高校の女子生徒のインタビューも、メイクアップとしての化粧をどれくらいしているかという点で分析した。しかし、スキンケアとメイクアップの両方に含まれ得る化粧品が存在した。日焼け止めである。日焼け止めは通常はスキンケア商品に分類されるが、日焼け止め入りの化粧下地はメイクアップのためとも考えられる。このあいまいさを考慮し、本研究ではインタビュー協力者の認識を尊重することにした。インタビュー協力者が日焼け止めや日焼け止め入りの下地を塗ることを化粧実践と認識した場合は化粧実践として、そうでない場合は化粧実践ではないとみなした。

またメイクアップ商品として通常は分類されない、アイプチ（一重瞼を二重にする商品の総称）と、普段は眼鏡だが化粧をするときにコンタクトレンズを着用することも、化粧とみなした。理由は、インタビュー協力者がアイプチを使ったり、眼鏡をコンタクトレンズにするのは、化粧映えを良くするためだと語っていたからである。また、睫毛をビューラーで上げることを化粧として言及したインタビュー協力者がいたので、彼女の認識を尊重し、これも化粧に含めて考察する。

上記のような基準で化粧実践を考察した結果、インタビュー協力者を4つに分類できることがわかった。すなわち、グループ1) 学校の内外で化粧をしている女子生徒、グループ2) 学校では化粧をしないが学校外ではする女子生徒、グループ3) 学校では化粧をするが学校外ではしない女子生徒、グループ4) 学校の内外で化粧をしない女子生徒の4つである。人数の内訳は、グループ1が11人、グループ2が15人、グループ3が1人、グループ4が5人である。下記に登場する環奈、真由、恋歌、奈々、未来、寧音、祐実、華、有栖、爽、翔子がグループ1に、玲、明衣、星羅、結衣、日菜子、珠梨、藍、有里子、紬、静香、香織がグループ2に、里実がグループ3に、瞳、恵、夏海、貴絵がグループ4にそれぞれ属する。なお、女子生徒の名前はすべて仮名とし、個人の特定につなが

り得る情報は内容に影響を与えない範囲で改変を加えた。

南風高校では制服が決められている以外に、どのような服装をすべきかについての校則というものが存在せず、全生徒に配布されている冊子の中の「生徒指導」の項目に簡単な記載があるだけである。すなわち、服装は清潔にすること、髪型は学生らしいものにし、パーマや染髪は禁止、装飾品の着用も禁止とされている。この冊子では、化粧をしてはいけないとは書かれていない。しかし、教員用の生徒指導のマニュアルには、「化粧は、直ちに落とさせる。」と記載され、学校では化粧を禁止するという方針があることがわかる。インタビューした女子生徒によると、教員が女子生徒の化粧を発見すると、メイク落としを持ってきて、その場で化粧を落とすように指導すると語っていた。

4-1 なぜ化粧をするのか？

インタビュー・データの分析から、化粧を始めた理由と化粧を継続している理由の二種類の理由が明らかになった。また研究方法で述べたように、理由に関する抽出されたカテゴリーは一部重なりを持っている。

4-1-1 化粧を始めた理由

(1) 友達やクラスメートの化粧を見て

祐実は、高1のクラスで他の女子が化粧をしているのを見て、2学期から化粧をするようになった。日菜子は化粧を始めた時期には言及していないが、一番仲がいい友達が色つきリップ（色がついているリップクリーム）をつけていて、自分にも似合うかなと思ってつけ始めた。里実は、高2の部活の合宿で、そこにいた女子の1人に化粧をしてもらってとても楽しかったのも、それ以来学校で時々赤っぽい口紅を塗るようになった。この3人は、友達やクラスメートの化粧を見て興味を持ち、実際自分でも化粧をしてみても効用を実感し化粧を始めたと考えられる。

(2)母親から化粧を勧められて

a. 女子高生はリップをつけたほうがいい

藍は高校に入学してから、学校外で化粧をするようになった。それは「お母さんに、なんか、ドラッグストアとかであるリップみたいのを買ってもらって色つきの、それでそこから、なんかいいなって思って、なんか気になり始めて」だと言う。また有栖によると、「ママも、その（高校では：筆者）リップとかは塗ってって、って言って」と話し、母親が高校で色つきリップを塗っていたことを彼女に語っている。さらに結衣は、母親から「高校生なんだからリップぐらいつけたらとかはよく言われますね（笑い）」と語っている。

b. 可愛くない子でも変われる

有里子は化粧に対して否定的な見方をしていたが、「なんか化粧って変わるって言われたんですよ、お母さんに。なんか化粧ってほんとに一どんなに可愛くない子でも変われるんだよって言われて」見方が変わった。そこで試しに口紅を塗って見たら、化粧で自分の顔が変わることを発見し、その変化を喜び、家族で集まるときに後輩からももらった口紅をつけるようになった。

(3)友達、クラスメート、母親からの影響を受けて

この理由は、(1)友達やクラスメートの化粧を見て、と(2)母親から化粧を勧められての 카테고리との重なりを持っている。紬は、中学の時にクラスメートや他のクラスの女子が化粧を始めたので、化粧に興味を持ちはじめた。母親は、紬は女の子なので「せっかくそういうので楽しめるんだから」と化粧を勧めた。しかし、自分の親しい友達が化粧をしていなかったの自分もしなかった。高校入学後「周りの友達とかが、少しちょっと明るめのリップを塗って」いたり、「友達からも、やってみなよって言われて」、学校外で色つきリップを塗るようになった。紬の例では、友達などの影響とともに、化粧は女の子だけが楽しめる特権なのでそれを楽しんだほうがよいという母親の語り、彼女を化粧に誘っていることを示している。

(4)化粧への興味

有栖は小さいころから化粧に興味があった。へ

アメイクになることが夢で「ファンデーションとかは塗らないんですけど、こうリップつけたりとかはずっと小さいときからしてました。」と語る。このようにグループ1の有栖は、インタビュー協力者の中で最も早い時期から化粧に親しんでいる。対照的にグループ2の中で、化粧を始めた理由として小さいころから化粧に興味があったからと語った女子生徒はいなかった。

(5)学校外での大人からの影響

玲は、学校では日焼け止めを塗っているが、彼女はこれを化粧をすることとは捉えていない。学校外ではライブに行くと、年上の人たちが多くて、その人たちはメイクをしている。その人たちの中で「浮かない程度に、メイクをするのは、いいかなって思って、多分中2か中3ぐらいから多分やり始めてますね。」と語っている。また明衣が最近メイクをするようになったのは、自分が学校外で所属しているクラブの発表会でメイクをしたからだと言っている。玲と明衣は、学校外で関わる大人の女性が化粧をしているので、自分も化粧をすることでその一員になろうとしている。

4-1-2 化粧を継続している理由

(1)素肌を白く、きれいに見せるため

環奈は、中学の頃から、自分の肌を「地黒」だと認識し、化粧で白くしようと思っていた。現在は多くのファンデーションを「いろいろ試して、あ、この色がいいとか、あとどれが一番もつとか、あとどれがくすまないとかどれが肌きれいに見えるとか」を考えて「試行錯誤」している。真由は中学の頃から「肌白く見せたいのと、日焼けしたくないので」、日焼け止めを塗るようになり、高校入学後、日焼け止め、化粧下地、色つきリップを塗っている。南風の女子は肌が「白い子が多くて、いいなあって思って、若干自分の（肌が：筆者）黄色いのが気になってき」たので、化粧下地を塗っている。筆者が、このことを聞くまでは彼女が化粧をしているとは思わなかったと伝えると、「わかんないくらいですよ。」「自己満足なんで、いいんです。ふふふ（笑い）。」と答えている。これらの語りは、白い肌を持つ自分という、想像された

自己に向かって化粧実践をやり続けることが、自分に満足をもたらすものであると認識していることを示している。

(2) 血色のよい顔にするため

恋歌は高1の途中から、唇に色がなくて具合悪そうに見えるので、色つきリップを塗るようになった。奈々も、恋歌と同じで、「自分の顔血色ないなと思って(笑い)。さすがに血色ないのはヤバいなみたい。そんな感じでした。」と語った。恋歌と奈々に共通するのは、自分の顔色が悪いと認識し顔色を良く見せるために、唇に色つきリップを塗ることで顔色を良く見せようとしていた点である。これは色つきリップを塗ることが、一部の女子生徒にとって、身だしなみに近いものとして実践されていると解釈できる。なぜなら、彼女たちは色つきリップを塗ることを「顔色が悪い顔」(健康ではない顔)を「血色がよい顔」(健康である顔)にするために必要な最低限の基準とみなし、実際は、唇に赤みがある顔が良いという美に関する基準になっているのに、健康に関する基準とみなし、美に関する規範としては見なしていないからである。

(3) 顔の印象を変えるため

未来は、自分の顔を「薄い顔」とか「ギャルのスッピン顔、みたいな感じに、言われたり」することがあると語った。「ギャルのスッピン顔」とは、普段濃い化粧ではっきりとした顔をしている人が、化粧を落とすことで作られる印象が薄い顔を意味している。つまり、自分の素顔の印象が薄いと認識し、それを変えるために化粧をしている。

(4) 可愛い二重の目をつくるため

寧音の右目は二重なので、一重の左の目にだけアイプチをして、二重にしている。きっかけは、「自分の顔を見たときに二重のほうが可愛いってか(笑い)、好みだったので、ああここ二重にしたほうが多分、お目々パッチリしてバランスも良くなる、かなーと思う」たからだ。一方、学校以外では、「二重のほうが、乗せやすいし、可愛い」ので、アイシャドーなども使う。このように一重の目を二重にするのも彼女にとっては化粧であるが、二重の目がさらなる化粧の前提条件になっている。

里美も同様の考えを持っていた。学校ではたまに色つきリップをつけるが、学校外では化粧をしない。なぜなら、一重の自分の目を二重にしてから化粧をしたほうが、アイシャドーなどを塗ったときに綺麗に見えると考えているからだ。

(5) 好きなモデルのようにになりたいから

静香は、好きなモデルが雑誌に掲載されていると「私も、こんなふうになりたいなと思って、描くこととかメイクをしたりすることは、よくあります。」と語っている。インタビューに協力してくれた女子生徒に好きな女性タレントやモデルを尋ねると、32人中22人の好きな理由の中に、少なくとも顔や体型などの外見が言及されていた。22人のうち、3人が具体的に挙げた女性タレントになりたいと語った。一方で、好きな女性モデルになりたいと語った女子生徒はいなかった。大多数の特定の女性タレントやモデルへの思いは、翔子の次の語りに代表される。彼女は言う。「普通になんか憧れただけで、そんなになんか猛烈に、な、何かをして、そういうふうになりたいっていうのは、あんまないです。」憧れの存在になりたいと思う女子生徒が少数である中、さらに憧れの存在に自分を近づけるために化粧をするという理由を挙げたのは静香だけだった。

(6) 化粧が好き

玲は、学校以外で外出する時、ファンデーションを塗って、アイラインとかアイシャドー、派手すぎない色の口紅をつける。化粧するのは「プライベートはもう自分の好きなことをやりたいって思って」いるからで、「周りから可愛いって思われたいっていうのが・・・あるけれどやっぱり、自分の好きなことをして、いたいから」化粧をする。玲は、可愛い自分という「想像された自己」を構築するのが目的であるが、その目的が達成されなくても、ただ化粧をすることだけでも楽しさを感じている。化粧をする頻度は少なく、化粧をすることで特に困ったことはないと答えていることから、玲は想像された自己を構築するために費やす代償を感じることなく、想像された自己の積極的な側面、楽しさのみを感じている。

(7)大人の女性の礼儀だから

明衣は知り合いの美容師から「化粧は女の礼儀って言いますしねみたいな話を聞」いてから、おしゃれとして化粧をすることもあるが「自分が、大人の女性になっていくときの段階で、その化粧っていうのを身につけていくための一つの勉強」と考えている。星羅は「大学生になったり、社会人になったとき・・・お化粧するのが礼儀とか・・・言われてるから」、学校では化粧できないので「急にメイクできるわけがないと思うし・・・それで練習」として化粧を学校外でしている。しかし、いやいやながら練習しているのではなく、「やっぱり周りの子もやってるし自分もやってみたいっていう」と語っているように、積極的に化粧の練習を楽しみながら行っている。この認識は、(6)化粧が好き、と重なりを持っている。

明衣と星羅の語りから、化粧は大人の女性の礼儀という考えは、鈴木(2006)が指摘するように今も存在し、女子生徒たちの一部はその考えを受け入れて化粧をしている。一方で明衣が言及したように、化粧は趣味でもあるので好きだから行っている側面もある。

4-2 なぜ化粧をしないのか？

化粧をしない女子生徒は、化粧に興味がある女子生徒と、化粧に興味がない女子生徒の2種類で構成されていた。

4-2-1 化粧に興味がある女子生徒の理由

瞳が化粧をしていない理由は、肌が強くないので「化粧品を選ばないとすごく、かぶれちゃったり」するからだ。「学校だったら別に、しなくても・・・いいかな、っていう感じなんですけど、あの、さっき言ってたイベントとかライブに行くときは、極力できるならして行きたい」。なぜなら「やっぱり、その場に合うようにしたいからですねんか、おしゃれな人とか・・・(イベント：筆者)に合わせた格好してくる人が多いので、そこに自分も馴染みたいなって気持ちが強」いからだ。この気持ちは4-1-1(5)で玲も語っている。

この瞳の例は、化粧が身だしなみとされてしまうと、生理的に化粧をすることが難しい女性を苦しめる可能性を示している。なぜなら、化粧が身だしなみとされることは、すべての女性は化粧をすることができることを想定しているのだから、瞳のように化粧をしたいが生理的にできない女性を礼儀に反する女性として扱う可能性が高いからだ。

4-2-2 化粧に興味がない女子生徒の理由

化粧をしていなくて、かつ化粧に興味がないと答えたのは、恵、夏海、貴絵の3人である。恵も、瞳と同様、肌が非常に弱いので化粧は七五三以外でしたことはない。化粧をしないのは「面倒くさいからです(笑い)。お化粧、似合わないし・・・化粧しても映える顔じゃないし、大体肌が弱いんで、なんかつけるってこともちょっとできないんですよ」と語った。七五三以来化粧をしていないので、似合わないとか化粧が映えないかどうかは、本当は分からないと推察される。この語りは、生理的に化粧できないので、化粧は似合わないと決めつけて化粧について考えることをやめていることを示唆している。

夏海は化粧を「なんか、気持ち悪い。」と表現した。化粧をすることを、このように率直に否定的に断言したのは彼女だけだった。気持ち悪いと感じるのは、いとこの結婚式で化粧をしてもらったら、

はっきりしたメイクをさせられて・・・顔見たときに(笑い)、こんな変わっちゃうんだっていうのちょっとびっくりしちゃって・・・お家帰って落とした瞬間なんか、顔にいろいろ塗りたくられたのが取られて、すっきりして。なんで、お化粧は、あんまり好きじゃないです。

ときっぱり答える。一方で、「大人になったら、そのやらなきやいけないじゃないですか(笑い)。マナーとして。」と語った。そう思うようになったきっかけは、テレビで「全員、すっぴんでやる会社みたいな特集とかがあって、それでお化粧ってマナーだったんだって思って(笑い)」それからだ

という。彼女によると、化粧がマナーだからそれに反することをやっている会社が話題になるのだと考えたと言う。

貴絵がお化粧をしない理由は、「やったことはないんですけど、母親が、あの一、(肌が荒れるから：筆者)やめときなよみたいな感じで言ってたので、(肌が：筆者)荒れちゃうのは嫌」だからである。この化粧をすると肌荒れするという考えは、数人の女子生徒も言及している。例えば明衣は、彼女の従妹が化粧品会社に勤めていて、「毎日すると・・・肌が荒れちゃうから」と言われ、「学校に行くときのメイクなんて(大学生になってからも：筆者)遅くないんだからっていうふうに言われている」ので、学校では化粧をしていない。結衣は「よく友達から肌荒れするとか・・・よく聞くんで、なんか化粧怖いなと思ったり、する」ので、友達と外出するときに色つきリップをつけるぐらいで、「ファンデとか、うんアイメイクもなんにもしない」。有栖は「それに実際なったわけじゃないんですけど、やっぱなんかファンデーションとか今は塗ってないんですけど、やっぱ大人とかになってこう仕事、とかに行くときに、毎日塗ってたら、私肌弱いんですけど、多分荒れるのかなって思ってる。」いる。明衣、結衣と貴絵の違いは、明衣と結衣が肌荒れを心配し化粧をする頻度や程度を制限しつつ化粧をしているのに対し、貴絵はまったく化粧をしないという選択をしている点である。一方、有栖は4-4-3で述べるように、将来の肌荒れの可能性を高額な化粧品を買うことで解決しようとしている。

4-3 化粧の効用

化粧をしている女子生徒たちは、化粧で得られる幾つかの効用を指摘している。

4-3-1 楽しさ、高揚感、自信

環奈は「お化粧って楽しい」と語る。玲は化粧をしている「この時間だけは、もうウキウキな感じ」になり、有里子は口紅をつけると、(気分が：筆者)「変わりますね。ふふふ(笑い)。やっぱり

ちょっとなんか、ワクワクする」。華と有栖は口紅や色つきリップをつけると気分が「ルンルン」になる。有栖は「お気に入り(のリップ：筆者)だから、もう、ずっとつけてるって感じで(笑い)、めっちゃルンルンになります。」と化粧をすることで楽しさを感じていることを表現している。

また一部の女子高生は化粧をすることで高揚感を感じている。爽は化粧をしていると「ちょっとは気分上がるかなって感じ」を経験し、珠梨は口紅を塗ると「あの普段からつけられないものなので、結構楽しく、気分上がりますね。」と語る。真由は化粧をして「理想としての自分に近づけてるな⁽⁶⁾って思うと、ちょっときれいになれたなって思うと、元気が出るんで、テンション高くなれる。」と語る。

さらに何人かの女子高生は化粧をすることで自信を得ている。星羅は化粧をすると「うーんやっぱりちょっとは自信持てたりはする一と思いません。」と語り、明衣は「化粧した後は、少し自信がついたような気持ちにふとした瞬間、なったときは、あります。」と語る。未来は化粧をすると、「やっぱりちょっと変わります。あつ、大丈夫だなみたいになります。ふふふ(笑い)。ちょっとなんか強い気持ちになります(笑い)。」と語る。

4-3-2 欠点を隠せる／より良く見せられる

有栖は、「アイシャドーしてると写真写りいいかなって思」う。逆に「してないと・・・目が腫れぼったく見えたりするときがあるなって思」う。奈々は色つきリップを塗ると「満足。」する。なぜなら、血色のない自分の顔に血色が加えられるからである。恋歌は化粧をすると、くまや「ちょっとしたニキビとか、なんかそういうの(ママ)ある程度隠れる」、日菜子は顔が「はっきり」とそれぞれ思っている。環奈も「肌のきめが細くないからあんまり肌がきれいに見えない、(自分の：筆者)肌質」を、化粧をすることで「肌がきれいだねって言われるようになったりとかあと肌白いねとか」言われるようになったと語る。

4-3-3 変身できる

化粧での変身を最も楽しんでいたのは寧音だ。外出する時、化粧で自分を「作り込んで・・・お洋服とかに合わせたり・・・その日は自分をプロデュースするじゃないですけど、上から下まで、やれるので、楽しい、ですね。」と語る。寧音の母親の友人が服飾関係の仕事をしており、その影響で母親がファッションに詳しくなり「一つの系統の服にかたまらない感じで育ったので」、外出する時に着る洋服の種類が幅広い。その洋服に合わせて化粧を変え、普段とは違う自分に変身している。

4-3-4 他人の自分に対する評価が上がる

祐実は他の女子に「可愛いねって言われて・・・なんか、おしゃれだねとか、言われたりとか、することが、多いから、なんか（化粧は：筆者）したほうがいいかなって。」思う。祐実と同じように、藍は化粧をすることで「なんか可愛く見られる」ことがあると指摘する。紬は友達と出かけるときは化粧をする。すると「似合ってるよとか、結構、私の周りとか、ほんと正直な人ばかりなんで、結構素直に言ってくれて、あっ、ありがとうみたいな（笑い）感じで。」自分の化粧を褒められ嬉しくなるからである。これらの語りは、一部の女子生徒が化粧をすることで他人の自分に対する評価が上がると認識していることを示している。

環奈は化粧をすることで「肌がきれいだねって言われるようになったりとかあと肌白いねとかまああと可愛いとかは、言われる」ようになり、特に「高校入ってから、男の子から可愛いって言われる回数がすごい増えたのとあと告白してもらえ回数が増えた」と語る。化粧によって異性から可愛いと認識されるようになったと語ったのは環奈だけだった。

4-3-5 大人っぽくなる

香織は学校外の化粧でも口紅しか塗らないが、塗ると「今、ちょっと大人っぽくなってるかもみたいな。そうなんか小学生のときとかは絶対全然興味もなかったし、持ってなかったのをつけてなかったけどなんか今は、高校生になって、あ大人っ

ぽいみたいなのは思います。」と語る。香織は化粧をすることは大人の女性が行うことだと認識し、口紅を使うことで自らも大人になった気分を味わっている。化粧をして自分が大人に近づいていると感じることは、裏を返せば、香織がまだ大人になっていないことを意味する。

4-3-6 化粧の効用をあまり感じない

奈々は4-1-2(2)で、色つきリップが自分の顔に血色を加えていることを認めているが、それ以外の効果は「特にない」。理由は、「メイクがあんまり自分できない、わかんないんですよ。だから・・・大したことができない。ふふふ（笑い）。」だからである。恋歌も4-3-2で言及した効用の他には、「自分の化粧の技術でやってもあんま変わったかどうかはなんか、まあまあ微妙な感じで。まあ、（化粧をすると自分が：筆者）ちょっと違う（笑い）みたいな感じの感覚」である。奈々と恋歌は化粧の効用を強く感じないので、さらに多くの化粧品を使って化粧をしようと思わないと推測される。

4-4 化粧の代償

女子高生たちは上述した化粧による効用を認識しつつも、一方で化粧による代償も認識していた。

4-4-1 化粧をすることによる面倒くささ

祐実の水筒に口をつけると、そこに色つきリップが「つくのが。それだけが、嫌だし。あと、ご飯とか食べてるときも、（食べ終わったら：筆者）もう1回塗り直したりとか、しなきゃいけないかな」と思っている。つまり色つきリップが飲食で落ちたら塗り直さなければいけないので、それを面倒くさいと感じている。香織は化粧を「落とすのがもう面倒くさいですよ。」と語り、だから学校外で口紅をつける以外の化粧をしないと語る。

4-4-2 肌が荒れる

この点は、4-2-2での考察と重なる部分がある。

肌が非常に弱くて化粧をすると肌に何らかのトラブルが起これると述べているのは、瞳と恵であった。また珠梨も「ものすごく肌が弱くて、あのつけれるものがほとんどない」が、珠梨は瞳や恵とは異なり、学校の外で友達と出かける時は口紅を塗る。

4-4-3 お金がかかる

環奈は、化粧をして「困るのは、1 回試し始めると私いろんなもの・・・買っちゃって、お金がかかる」ことだと語る。有栖は、化粧をすることで今困っていることはないが、将来は起こると思っている。

やっぱ大人とかになってこう仕事、とかに行くときに、毎日塗ってたら、私肌弱いんですけど、多分荒れるのかなって思って。でママもすごい肌が弱くて・・・肌にご優しいやつをわざわざ買ってママが・・・なんだろ高いけど、お肌のために買わないといけないっていうのは、大変だなと思います。

弱い肌に化粧をするために高額な化粧品を買わなければならないことが、将来自分にも起こると有栖は予想している。

4-4-4 化粧をしていない顔で外出できない

環奈は 4-4-3 で化粧品を買ってお金がかかると述べているが、その他に化粧から「抜け出せないことですかね。すっぴんで学校行けないこと。それがすごい困ります。困るっていうか、依存なんですかね。もう半依存な気もするんですけど、それがとにかく困るかなって。」と語っている。環奈は「すっぴんで学校」に行けただけではなく、すっぴんで外に出ることができなくなり「それがちょっと怖い(笑い)」と語る。家族や親戚に会う以外は近くの駅に行くにも化粧をすると語る。環奈はその理由を、自分が化粧に半分依存しているからだとして分析する。「お化粧するのは悪いと思わないんですけど、でもできれば一番すっぴんで可愛いのが一番ベストじゃないですか。」と語る。化粧をすることを楽しみ満足している環奈であって

も、化粧をした顔は「作られたもの」であるという思いを持っている。もし素顔が可愛かったら化粧をする必要もなく、化粧に依存することもないだろうと環奈は予想している。しかしこのような状態でも、化粧を止めるという選択肢は浮上しない。それは、化粧をすることが楽しく化粧をした顔が他人から評価されているので、それを手放せなくなっているからだと思われる。

5. 考察

筆者は当初、女子高生は主に友達やクラスメートの影響を受けて化粧を始めていたと予想していた。しかし、実際は母親から化粧を禁止される女子生徒は非常に少なく、むしろ母親からの勧めで化粧を始める女子生徒たちが少なくなかった。なぜ母親たちは化粧を娘に勧めるのか？生徒の誕生日と出生順位別平均出生年齢（国立社会保障・人口問題研究所、2010）から、珠梨の母親は1973年生まれで1990年に高2、藍、有栖、結衣の母親は1974年生まれで1990年に高1だったことが推測される。一方少なくとも1990年ごろには女子高生の中で化粧が行われていたことが推測されるので、珠梨、藍、有栖、結衣の母親たちは高校時代に化粧をし、その体験をもとに自分の娘にも化粧をすることを勧めた可能性がある。実際、有栖の母親は高校で色つきリップを塗っていたことを有栖に語っている。

女子生徒たちが語った化粧を継続する理由、すなわち素肌を白く、きれいに見せる、顔の印象を変える、可愛い二重の目をつくる、化粧が好きという理由はすべて、「想像された自己」に向かって化粧を行い続けることを素晴らしいと感じ、そのことに力づけられ、楽しさを感じるからという、Widdows (2018) が指摘した4つ目の理由に包含されることが明らかになった。また女子高生たちは、素肌が白く二重の目を持った印象が薄くない顔を、美の理想が具体化された顔と考えていることが明らかになった。

色つきリップを塗ることで「血色のよい顔にする」ことは、一部の女子生徒にとって、身だしな

みに近いものとして実践されていた。なぜなら、色つきリップを塗ることが、「顔色が悪い顔」(健康ではない顔)を「血色がよい顔」(健康である顔)にするために必要な最低限の基準とみなされ、美に関する規範として見なされていないからである。一方で、南風高校では化粧は禁止されているので、化粧をしたい気持ちがあるがしない女子生徒がいることも予想され、色つきリップを塗ることで「血色のよい顔にする」ことは、少なくとも学校では完全な身だしなみにはなっていない。

明衣と星羅の語りから、化粧は大人の女性の礼儀という考え方が今も存在し、彼女たちはその考えを受け入れて化粧をしていた。一方夏海は、現在は化粧をしていないが、化粧は大人の女性のマナー、つまり礼儀なので、将来は化粧をしなければならぬと語っていたので、彼女もこの考えを支持していた。香織は礼儀という言葉は使っていないが、化粧をすることは大人の女性が行うことだと認識していたので、化粧は大人の女性の礼儀という考え方を間接的に支持していると解釈できる。したがって、化粧は大人の女性の礼儀という考え方は存在し続け、その影響力を若い世代である女子高生に与えていると考えられる。

化粧をしない女子生徒には、化粧に興味があるが生理的な理由で化粧ができない者がいることが明らかになった。化粧が大人の女性の身だしなみとされている日本では、大人になった時に化粧をしていないと、身だしなみがきちんとしていない人、すなわち礼儀を欠く人と判断され非難される傾向にある(Ashikari, 2003)。したがって生理的な理由で化粧ができない女子高生は、大人になってからたとえ化粧をしたくても化粧をしていないということで非難に晒される可能性が高い。また生理的には化粧をすることができるが、化粧をしたくない女性も同じような非難を受けることになる。したがって、化粧をしたい人の化粧を保障しつつ、化粧が大人の女性の身だしなみという規範を変え、化粧の有無でその女性の評価が変わらないようにする必要がある。

化粧の効用の一つとして、女子生徒たちは「楽しさ、高揚感、自信」を挙げていた。彼女たちが

指摘している楽しさや高揚感は、松井ら(1983)が構築したMモデルが指摘している「化粧行為自体がもつ満足感」に該当する。しかし女子生徒が述べている楽しさは、Mモデルが指摘している「創造の楽しみ」(様々な化粧品を使って自分に合った顔を作ること)と必ずしも同じではない。また「高揚感」はMモデルでは指摘されていない。女子生徒たちが述べている「自信」は、このモデルが言及している「心の健康」の一部である「自信や自己充足感」に該当する。一方で女子生徒たちが指摘している楽しさや自信は、Widdows(2018)が述べている想像された自己に向かって美容実践を行い続けることで感じられるという点に合致している。

第二の効用として、何人かの女子生徒たちは「欠点を隠せる／より良く見せられる」ことを指摘していた。有栖はアイシャドーをして腫れぼったい目を、恋歌は化粧でニキビを隠していた。「欠点を隠せる／より良く見せられる」という効用は、Mモデルの「外見的欠陥の補償」に該当する。

次に指摘された化粧の効用は「変身できる」で、これはMモデルの「変身願望の充足」に該当する。また「他人の自分に対する評価が上がる」という化粧の効用も明らかになった。環奈は化粧をすることで男子から可愛くみられるようになったと語っているが、藍と祐実も化粧をすることで周囲の女子から可愛く見られるようになったと語っている。前者は、Mモデルで指摘されている「異性への魅力度の上昇」に該当するが、後者はMモデルの「同性への優越意識」ではなく「同性への魅力度の上昇」と呼べる効用である。「大人っぽくなる」という化粧の効用はMモデルでは指摘されていない。なぜなら、このモデルを構築するために行われた調査の回答者の約9割が20代以上の女性であったので、10代の女子高生に特有の効用が調査では把握されなかったからだと推測される。

女子生徒が指摘した「化粧をすることによる面倒くささ」と「肌が荒れる」という代償は飛田(1996)でも言及されているが、一方化粧品を買うために「お金がかかる」という第三の代償は飛田(1996)では言及されていない。重要なのは、化粧で金銭の出費が増えても化粧しないという選択肢

は環奈や有栖には考えられていない点である。なぜなら彼女たちは化粧によって幾つもの効用を得ており、代償を払ってもそれらを手放したくないと認識しているからである。

女子生徒が語った化粧の代償の中で、化粧をしていない顔で外出できないという点が最も深刻である。環奈はこのことを、化粧に自分が依存しているからだとして表現していた。Mモデルでは、化粧をすることが外見的评价を上昇させ、それがひいては自信や自己充足感といった心の健康を生み出すと想定し、余語ら（1990）の研究もそれを支持している。しかし環奈の語りは、幾つかの効用を生んでいる化粧が、化粧をせずに彼女が他者に会うことをできなくさせ、それによって彼女が不安を感じていることを明らかにしている。

6. 結論

女性たちがなぜ理想とされる身体の構築を様々な美容実践を通じて行っているのかという問題に、日本のジェンダー研究は強い関心を払ってこなかった。本研究は南風高校の女子生徒の化粧実践を考察することで、この問題の重要性を指摘することができた。次に彼女たちの美容実践を、第二波フェミニズムとそれを批判する研究を通じて考察することにより、第二波フェミニズムで主張されていた、化粧は男性による強制という視点の限界と、女性の化粧を想像された自己から考察する新たな方向性を示すことができた。また研究対象を女子高生にすることで、10代の女性が人生の早い時期から大人の女性に課されている規範（化粧は大人の女性の身だしなみ）の影響を受けていることを明らかにすることができた。

しかし、南風高校の女子生徒たちの化粧に関する知見を日本の女子高生全体に一般化することはできないので、今後も研究を蓄積する必要がある。その際に考慮すべき点としては、女子高生が自由に使える金額と化粧の効用との関係である。自由に使える金額によって化粧品に消費する金額が変わっている（中村, 2004）、多くの金額を化粧品に使うことができれば、より化粧の効用を感じ

やすくなるかもしれない。また本研究で化粧を始めた理由に母親の影響が認められたので、母親が化粧をしているか否か、化粧をしている場合はその頻度などを考察し、娘である女子高生の化粧実践にどのような影響を及ぼすのかを考察する意味があるかもしれない。

注

- (1) 川上（2016）は、男女の高校生を対象に化粧意識（化粧に対してどのような思いを持っているか）について研究をしているが、この化粧意識はなぜ化粧をするのか／しないのかについての質問に対する答えとは異なる。
- (2) Widdows（2018）は、美の理想が道徳的枠組みとなっているのは西欧社会だけでなく、今や全世界的な広がりを持ち、特に女性に要求される美の理想を具体化した身体的特徴は収斂する傾向にあると指摘している。
- (3) 英語版（1995）では discipline となっており、日本語版（2020）は規律・訓練となっているが、Bartky（1991）がそれを disciplinary practices と呼んでいるので、規律実践という用語を使う。
- (4) 化粧実践に焦点を当てて論じている部分もある。
- (5) Dellinger and Williams（1997）では化粧をしない女性にもインタビューをしているが、その理由については明示していない。
- (6) 松井ら（1983）のモデルでは、「伝統的性役割に基づく identity の自覚」は「積極的な自己表現や対人行動」を経由せず、直接「自信や自己充足感」につながっている。
- (7) ジェンダー・アイデンティティと性的指向が定まっていない女子生徒と自分の性的指向が定まっていない女子生徒の化粧をする／しない理由、化粧の効用や代償の認識に、彼女たちのジェンダー・アイデンティティや性的指向は関係していなかった。
- (8) 太字は強調して発音していることを示す。

文献一覧

- Aapola, S., Gonick, M., & Harris, A. 2005. *Yong femininity: Girlhood, power and social change*. Palgrave Macmillian.
- 阿部恒之 2002 『ストレスと化粧の社会生理心理学』 フレグランスジャーナル社
- Anchieta, N. M., Mafra, A. L., Hokama, R. T., Varella, M. A. C., de Almeida Melo, J., Oliveria da Silva, L., Santos Alves da Silva, C., & Valentova, J. V. 2021. Makeup and its application simulation affect women's self-perceptions. *Archives of Sexual Behavior*, 50, 3777-3784. <https://doi.org/10.1007/s10508-021-02127-0>
- Ashikari, M. 2003. Urban middle-class Japanese women and their white faces: Gender, ideology, and representation. *Ethos*, 31(1), 3-37. <https://www.jstor.org/stable/3651863>

- Bartky, S. L. 1990. *Femininity and domination: Studies in the phenomenology of oppression*. Routledge.
- Baumgardner, J. & Richards, A. 2000. *Manifesta: Young women, feminism, and the future*. New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Beausoleil, N. 1994. Makeup in everyday life: An inquiring into the practices of urban American women of diverse backgrounds. In Nicole Sault (Eds.), *Many mirrors: Body image and social relations* (pp. 33-57). Rutgers University Press.
- Brumberg, J. J. 1998. *The body project: An intimate history of American girls*. Vintage Books.
- デジタル大辞泉「実践」小学館
<https://kotobank.jp/word/%E4%B8%83%E4%BA%94%E4%B8%89-73827>
- Dellinger, K., & Williams, C. L. 1997. Makeup at work: Negotiating appearance rules in the workplace. *Gender & Society*, 11 (2), 151-177. <https://doi.org/10.1177%2F089124397011002002>
- e-GOV 法令検索「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」
<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=335AC0000000145>
- Etcoff, N. L., Stock, S., Haley, L. E., Vickery, S. A., & House, D. M. 2011. Cosmetics as a feature of the extended human phenotype: Modulation of the perception of biologically important facial signals. *PLOS ONE*, 6 (10), e25656. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0025656>.
- Flick, Uwe. 1995. *Qualitative Forschung*. (小野博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳, 2002『質的研究入門—人間の科学>のための方法論』春秋社)
- Foucault, Michel. 1975. *Surveiller et Punir: Naissance de la prison*. (Alan Sheridan, trans., 1995, *Discipline and punish: The birth of the prison*. New York: Vintage Books)
- Foucault, Michel. 1975. *Surveiller et Punir: Naissance de la prison*. (田村叔訳, 1977, 『監獄の誕生：監視と処罰』新潮社)
- Gill, R. 2007. Postfeminist media culture: Elements of a sensibility. *European Journal of Cultural Studies*, 10 (2), 147-166.
- Girlguiding. 2016. *Girls attitudes survey 2016*. <https://www.girlguiding.org.uk/globalassets/docs-and-resources/research-and-campaigns/girls-attitudes-survey-2016.pdf>
- Graham, J. A., & Jouhar, A. J. 1981. The effects of cosmetics on person perception. *International Journal of Cosmetic Science*, 3, 199-210.
- Grogan, S. 2017. *Body image: understanding body dissatisfaction in men, women and children* (3rd ed.). Routledge.
- 半藤保・川嶋友子 2009 「女子大学生の体型とやせ願望」『新潟青陵学会誌』 1(1), 53-59. <http://doi/10.32147/00001295>
- 飛田操 1996 「化粧の個人的効果と対人効果に関する実証的研究」『コスメトロジー研究報告』 3, 145-157.
- Hodson, R. 1991. The active worker: Compliance and autonomy at the workplace. *Journal of Contemporary Ethnography*, 20 (1), 47-78.
- 石田かおり 2009 『化粧と人間：規格化された身体からの脱出』 法政大学出版局
- Jeffreys, S. 2015. *Beauty and misogyny: harmful cultural practices in the West* (2nd ed.). Routledge.
- Jones, A. L., Russell, R., & Ward, R. 2015. Cosmetics alter biologically-based factors of beauty: Evidence from facial contrast. *Evolutionary Psychology*, 13 (1), 210-229. <http://dx.doi.org/10.1177/147470491501300113>
- Jones, A. L., & Kramer, R. S. S. 2016. Facial cosmetics and attractiveness: Comparing the effect sizes of professionally-applied cosmetics and identity. *PLOS ONE*, 11 (10), e0164218. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0164218>
- 川上梅 2016 「高校生の自己意識・化粧意識・化粧行動の構造とそれらの関係」『繊維製品消費科学』 57(4), 298-308. <https://doi.org/10.11419/senshoshi.57.4.298>
- Kellie, D. J., Blake, K. R., & Brooks, R. C. 2021. Behind the makeup: The effects of cosmetics on women's self-objectification, and their objectification by others. *European Journal of Social Psychology*, 51, 703-721. <https://doi.org/10.1002/ejsp.2767>
- 菊池夏野 2019 『日本のポストフェミニズム：「女子力」とネオリベラリズム』 大月書店
- 国府田はるか 2014 「女子短大生の瘦身願望と身体イメージに関する意識調査(1)」『茨城女子短期大学紀要』41, 90-69.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2010 『人口統計資料集』 https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2010.asp?fname=T04-01.htm
- 国立青少年教育振興機 2018 『高校生の心と体の健康に関する意識調査報告書』 <http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/126/File/report.pdf>
- 九島紀子 2020 「第1章 メイクアップ」鈴木公啓編著『装いの心理学 整え飾るこころと行動』北大路書房, 16-27.
- Kvale, S. 1996. *Interview: an introduction to qualitative research interviewing*. Sage Publications.
- Lakoff, R. T., & Scherr, R. L. 1984. *Face value: Politics of beauty*. Routledge & Kagan Paul.
- LINE 株式会社 2020 「[現役 JK のメイク事情]約 7 割がお手本にしているのは・・・」 <https://research-platform.line.me/archives/35130821.html>
- 松井豊・山本真理子・岩男寿美子 1983 「化粧の心理的効用」『マーケティング・リサーチ』 21, 30-41.
- McRobbie, A. 2009. *Aftermath of feminism: Gender, culture and social change*. SAGE Publications.
- Miles, M. B., & Huberman, A. M. 1994. *Qualitative data analysis: an expanded sourcebook* (2nd ed.). Sage Publications.
- Mulhern, R., Fieldman, G., Hussey, T., Lévêque, J., & Pineau, P. 2003. Do cosmetics enhance female Caucasian facial attractiveness? *International Journal of Cosmetic Science*, 25 (4), 199-205. <https://doi.org/10.1046/j.1467-2494.2003.00188.x>
- 水村(久埜)真由美・橋本万記子 2002 「大学生のボディイメージと健康に関連する意識・行動および知識にみられる性差」『ジェンダー研究』 5, 89-98. <https://teapot.lib.ocha.ac.jp/records/37895#.YkVxrChBy38>
- Nash, R., Fieldman, G., Hussey, T., Lévêque, J., & Pineau, P. 2006. Cosmetics: They Influence More Than Caucasian Female Facial Attractiveness. *Journal of Applied Social Psychology*, 36

- (2), 493-504.
<https://doi.org/10.1111/j.0021-9029.2006.00016.x>
- 日本青少年研究所 2011 『高校生的心と体の健康に関する調査』 <http://www1.odn.ne.jp/~aaa25710/research/>
- Pipher, M. 1996. *Reviving Ophelia: Helping you to understand and cope with your teenage daughter* (ebook ed.). Random House.
- ポーラ文化研究所 2018 「女性の化粧行動・意識に関する実態調査 2015～2018 変化する 10 代後半の化粧行動」
<https://www.poholdings.co.jp/news/pdf/20181214.pdf>
- 2019 「平成から令和へ スキンケア・メークの行動と意識のうつりかわり」
<https://www.cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/report/pdf/201130heiseireiwa.pdf>
- ブチセブン 1990.4.1. 「女のこだもんメーク大好き！！」小学館, 32-33.
- 笹山郁生・永松亜矢 1999 「化粧行動を規定する諸要因の関連性の検討」 『福岡教育大学紀要.第四分冊, 教職科編』 48, 241-251. <https://ci.nii.ac.jp/naid/120006379491/>
- SPA ! 1993.6.9 「コギャルの魅惑 キーワードはカジュアル・ナチュラル・ヘルシー ポスト・ボディコン世代のそそる生態に迫る」扶桑社, 11-16.
- 鈴木由加里 2006 『女は見た目が 10 割 誰のために化粧をするのか』 平凡社
- 高橋幸 2020 『フェミニズムはもういらない, と彼女は言うけれどーポストフェミニズムと「女らしさ」のゆくえ』 晃洋書房
- 田中東子 2012 『メディア文化とジェンダーの政治学: 第三波フェミニズムの視点から』 世界思想社
- 宇山侑男・鈴木ゆかり・互恵子 1990 「メーキャップの心理的有用性」 『日本化粧品学会誌』 14(3), 163-168.
- Widdows, H. 2018. *Perfect me: Beauty as an ethnical ideal*. Princeton University Press.
- Wolf, N. 2002. *The beauty myth: How images of beauty are used against women*. Harper Perennial
- 余語真夫・浜治世・津田兼六・鈴木ゆかり・互恵子 1990 「女性の精神的健康に与える化粧の効用」 『健康心理学研究』 3(1), 28-32.
- 米澤泉 2008 『コスメの時代「私遊び」の現代文化論』 勁草書房